様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１２３５

研究課題名（和文）特別な教育的支援ニーズと学校適応スキルプロフィールの関連性

研究課題名（英文）Research of relation between special education needs and adaptive skills profile of students.

研究代表者
橋本　創一（Hashimoto, Soichi）

東京学芸大学・教育実践研究支援センター・教授

研究者番号：１０２９２９９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：学年，障害種，知的水準による特別な支援ニーズの差を検討するため，ASIST学校適応スキルプロフィールを実施した.
研究１では，発達に遅れや偏りがある幼児・児童・生徒を対象に、ASISTを実施し、個々の特別な支援ニーズの特徴を明らかにした。研究２では，小学校の通常学級に在籍する発達障害児の特別な支援ニーズについて調査した。その結果，障害種によって特別な支援ニーズが異なる可能性が示された。研究３では、１８ケースでASISTを用いてアセスメント、支援計画の立案、支援の実施をおこなった。

研究成果の概要（英文）：To explore the differences by the grade, disorder and level of intellectual development of special educational needs, we evaluate special education needs of the subjects using the ASIST (Adaptive Skills profile of students: Information for School-teachers and Trainers) scale. First, we carried out the ASIST for child and students with developmental disability. As a result, they have individual support needs. Second, we investigated the support needs of students with developmental disability. As a result, the special educatioaln needs may vary according to disorder. Third, we carried out the ASIST for 18 cases. In these case, we mede support plans, and carried out support.

研究分野：社会科学

キーワード：学校不適応

１．研究開始当初の背景

文部科学省の通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査によると，知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面に著しい困難を示す児童・生徒が 6.5%存在することが明らかになった．また，この児童・生徒について調査を行った時点で通級による指導・個別の教育支援計画の作成・授業時間内の個別の配慮などの支援がなされている割合が 55.1%であり，4 割近い児童・生徒はいずれの支援もなされていなかった．

また文部科学省の平成 23 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査によると，平成 23 年度間に連続又は断続して 30 日以上欠席した児童・生徒のうち不登校（何らかの心理的，情緒的，身体的，あるいは社会的要因・背景により，児童・生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること）を理由とする児童・生徒数は，小・中学校合わせて 117,458 人に上ることが明らかとなっている．不登校となった直接的なきっかけと考えられる状況として，不安などの情緒的混乱が 31,126 人（26.5%）と最も多く，無気力（28,676 人[24.4%]），いじめを除く友人関係をめぐる問題（17,227 人[14.7%]）が続いた．このような不登校との関連として発達障害も指摘され，発達障害の二次的な課題として，不登校などの学校不適応になりうることが指摘されている．

このように，不登校などの学校不適応問題は，発達障害でみられるような行動特性とも深い関連があり，また様々な要因の複合であることが多く，教育的介入の視点を持つことが難しいと考えられるため，児童・生徒一人ひとりの現状を把握し，整理することが求められている．

２．研究の目的

学校適応に関する研究を再視すると，スキルの中で活動と参加を明確に分けている研究は少なく，スキルの肯定的側面または否定的側面のどちらかのみに着目している研究が主であり，二つの側面を独立した形で作成されている尺度は少ない．

これらの問題意識から，スキルの肯定的側面を適応スキル，否定的側面を特別な支援ニーズとし，この両側面を独立して測定する尺度である ASIST 学校適応スキルプロフィール（Adaptive Skills profile of students: Information for School-teachers and Trainer）(以下，ASIST と表記する)を作成した．本研究の研究１では，発達に遅れまたは偏りが疑われる幼児・児童・生徒を対象として ASIST を実施し，個々の特別な支援ニーズの特徴を明らかにすることを目的とする．研究２では，小学校の通常学級に在籍する発達障害児の特別な支援ニーズについて，学年や障害種などの属性ごとの差異を明らかにし，属性ごとの特別な支援ニーズの特徴によるカテゴリー化の可能性について検討することを目的とする．研究３では、実際に ASIST を用いてアセスメント、支援方針の立案、支援の実施をおこなった例を収集し、分析を加えた。

３．研究の方法

（１）研究１：ASIST 学校適応スキルプロフィールと特別な支援ニーズの検討

①調査対象

幼児・児童・生徒 1534 名（有効回答率 44.8%）の保護者．郵送による質問紙法で実施。

②調査用紙

ASIST は A 尺度[適応スキルの把握]および B 尺度[特別な支援ニーズの把握]からなり，すべての項目に回答してもらった．

A 尺度[適応スキルの把握]

S-M 社会生活能力検査 14)，ABS 適応行動尺度 24)，KIDS 乳幼児発達スケール 15)，津守式乳幼児精神発達質問紙 25)26)，TS 式幼児・児童性格診断検査 22)を参考に作成され，5 領域各 20 の質問項目についてどの程度あてはまるかを 3 段階（「よくあてはまる[2 点]」，「あてはまる[1 点]」，「あてはまらない[0 点]」，「経験していないが，おそらくあてはまる[2 点]」，「経験していないが，おそらくあてはまらない[0 点]」）で回答する質問紙である（表 1）．5 領域（生活習慣領域，手先の巧緻性領域，言語表現領域，社会性領域，行動コントロール領域），個人活動と集団参加に影響する 2 つのスキル群（個人活動スキル群[生活習慣領域，手先の巧緻性領域，言語表現領域の合計得点]，集団参加スキル群[社会性領域，行動コントロール領域の合計得点]）および総合獲得レベル（A 尺度 5 領域の合計得点）の得点により，幼児，児童，生徒の学校適応スキルを測定する②B 尺度[特別な支援ニーズの把握]

学校不適応との関連が指摘されている知的障害，学習障害，自閉症スペクトラム障害，注意欠如・多動性障害，発達性協調運動障害について ICD-10 や DSM-Ⅴの診断基準や LDI，PARS，ADHD-RS，CBCL を参考に，10 領域計 50 の質問項目について 3 段階（「よくあてはまる[2 点]，「少しあてはまる[時々あてはまる][1 点]」，「あてはまらない[0 点]」）で回答する質問紙である（表 2）． 10 領域（学習領域，意欲領域，身体性・運動領域，集中力領域，こだわり領域，感覚の過敏さ領域，話し言葉領域］，ひとりの世界・興味関心の偏り領域，多動性・衝動性領域，心気的な訴え・不調領域），個人活動と集団参加に着目した 2 つのサポート因子（個人活動サポート因子［学習領域，意欲領域，身体性・運動領域，集中力領域，心気的な訴え・不調領域の合計得点］，集団参加サポート因子［こだわり領域，感覚の過敏さ領域，話し言葉領域，ひとりの世界・興味関心の偏り領域，多動性・衝動性領域の合計得点］），総合評価（B 尺度 10 領域の合計得点）に加えて学校生活における

活動と参加に影響する場面を分類した４つのニーズ側面（学習面[学習領域，意欲領域，身体性・運動領域の合計得点]，生活面[集中力領域，こだわり領域，感覚の過敏さ領域の合計得点]，対人関係面[話し言葉領域・ひとりの世界・興味関心の偏り領域の合計得点]，行動情緒面[多動性・衝動性領域，心気的な訴え・不調領域の合計得点]）の得点により，支援の必要度合いを示す要配慮支援レベルを算出する．

（２）研究２：小学校の通常学級に在籍する発達障害児における特別な支援ニーズの検討

①調査対象

東京都内の小児科クリニック・小学校での巡回相談を受診した通常学級に在籍する発達障害児 65 名（男児 56 名，女児 9 名）．対象児の基本情報，直近の知能検査の結果および ASIST を保護者，教師の聞き取りをもとに筆者が評定した．

② 調査内容

基本情報に関する項目（学年，性別，障害種別，主訴）、ASIST 学校適応スキルプロフィール

（３）研究３：ASIST 学校適応スキルプロフィールを用いた支援実践

１８事例において、教師や支援者が、子どもの学校適応スキルをアセスメントし、その結果を整理分析し、より明確な支援目標を立案した。

４．研究成果

（１）研究１

特別な支援ニーズについてクラスター分析を行うと支援ニーズの程度によって３つのグループに分類された．しかし，３つのグループごとに適応スキルに遅れがみられる領域数をみると，特別な支援ニーズの高さと適応スキルの高さは必ずしも一致しなかった．この結果から，発達的な視点で児童，生徒の学校適応を検討する際には，ADHD や ASD，軽度知的障害といった診断から導かれる支援ニーズに目を向けることも重要であるが，学校生活での支援レベルや具体的な援助の内容について評価し考えていく方向性も同時に重要視すべきことが示唆された．

（２）研究２

年齢の上昇に伴い興味関心の偏りに関する支援ニーズが軽減する可能性が示唆された．（表 1）また障害種ごとに特別な支援ニーズが異なる可能性が示された（表 2）が，DSM-Ⅳ-TR までの重複診断除外規定により対象児の診断名が行動特性を正確に反映していない可能性が推察された．さらに知的水準による比較では学習以外では支援ニーズに差が認められなかった．以上により，主訴など対象児の属性以外の要因でも特別な支援ニーズをカテゴリー化する必要性が示唆された．

表１　学年区分ごとの特別な支援ニーズ

		低学年 N=31		中学年 N=22		高学年 N=12		*F*値	多重比較
		M	SD	M	SD	M	SD		
領域	学習	1.87	2.75	2.18	2.08	3.50	3.37	1.63	n.s.
	意欲	4.29	2.04	4.91	2.33	5.17	2.95	0.81	n.s.
	身体性・運動	2.00	2.08	1.86	2.03	2.00	2.52	0.03	n.s.
	集中力	6.03	2.77	6.18	2.95	4.50	2.58	1.60	n.s.
	こだわり	2.74	1.86	2.27	1.91	1.67	1.87	1.48	n.s.
	感覚の過敏さ	2.94	2.39	2.82	2.94	3.83	3.83	0.54	n.s.
	話し言葉	1.87	1.12	1.64	1.26	1.92	0.90	0.35	n.s.
	興味関心の偏り	4.84	2.66	3.23	2.69	2.25	2.67	4.87 *	低>高
	多動性・衝動性	3.81	3.15	3.45	2.84	2.42	2.84	0.93	n.s.
	心気的な訴え・不調	1.74	1.95	2.27	2.64	2.33	2.50	0.47	n.s.
	B尺度総合評価	32.13	10.20	30.82	10.69	29.58	13.83	0.25	n.s.
因子	個人活動サポート因子	15.94	6.58	17.41	5.86	17.50	7.40	0.44	n.s.
	集団参加サポート因子	16.19	6.93	13.41	8.38	12.08	8.48	1.55	n.s.
ニーズ側面	学習面	8.16	4.47	8.95	3.87	10.67	6.21	1.26	n.s.
	生活面	11.71	4.10	11.27	5.16	10.00	5.62	0.56	n.s.
	対人関係面	6.71	2.90	4.86	3.58	4.17	3.07	3.71	n.s.
	行動情緒面	5.55	3.78	5.73	3.63	4.75	3.86	0.28	n.s.

*$p<.05$

表２　障害種ごとの特別な支援ニーズ

		IQ84以下 N=15		IQ85~109 N=33		IQ110以上 N=17		*F*値	多重比較
		M	SD	M	SD	M	SD		
領域	学習	3.67	3.02	2.15	2.39	1.29	2.64	3.38 *	～84>110～
	意欲	5.20	2.48	4.70	2.24	4.12	2.32	0.88	n.s.
	身体性・運動	1.60	1.88	2.30	2.34	1.59	1.84	0.91	n.s.
	集中力	6.87	2.70	5.76	2.70	4.94	3.03	1.91	n.s.
	こだわり	2.53	2.29	2.39	1.52	2.24	2.25	0.10	n.s.
	感覚の過敏さ	2.33	1.29	2.94	2.94	3.94	3.56	1.33	n.s.
	話し言葉	1.87	0.99	1.76	1.06	1.82	1.38	0.05	n.s.
	興味関心の偏り	4.33	3.22	3.39	2.63	4.18	2.88	0.75	n.s.
	多動性・衝動性	3.40	3.20	3.39	3.03	3.53	2.90	0.01	n.s.
	心気的な訴え・不調	1.67	1.99	2.15	2.53	2.12	2.12	0.24	n.s.
	総合評価	33.47	8.62	30.94	10.71	29.76	13.38	0.47	n.s.
因子	個人活動サポート因子	19.00	6.92	17.06	6.11	14.06	6.08	2.55	n.s.
	集団参加サポート因子	14.47	8.03	13.88	6.87	15.71	9.49	0.30	n.s.
ニーズ側面	学習面	10.47	5.25	9.15	4.80	7.00	3.28	2.40	n.s.
	生活面	11.73	4.06	11.09	4.16	11.12	6.35	0.10	n.s.
	対人関係面	6.20	3.21	5.15	3.21	6.00	3.62	0.67	n.s.
	行動情緒面	5.07	3.95	5.55	3.71	5.65	3.66	0.11	n.s.

*$p<.05$

（３）研究３

幼児から成人までの 18 名に ASIST を適用し、支援計画を立案し支援実施をおこない、その結果をまとめた。本報告書では、紙面の制限がある都合上、１事例のみ紹介する。

事例 8

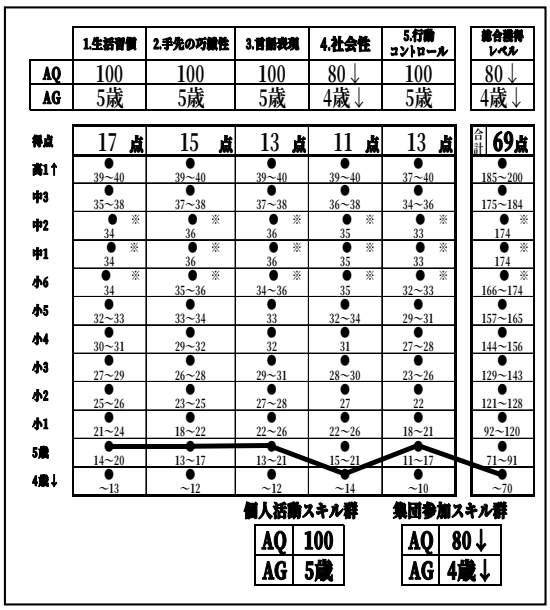
幼稚園年長クラスに在籍する自閉症スペクトラム障害のある５歳児―こだわりや興味関心の偏りによって活動の参加が妨げられる―

① ASIST の結果

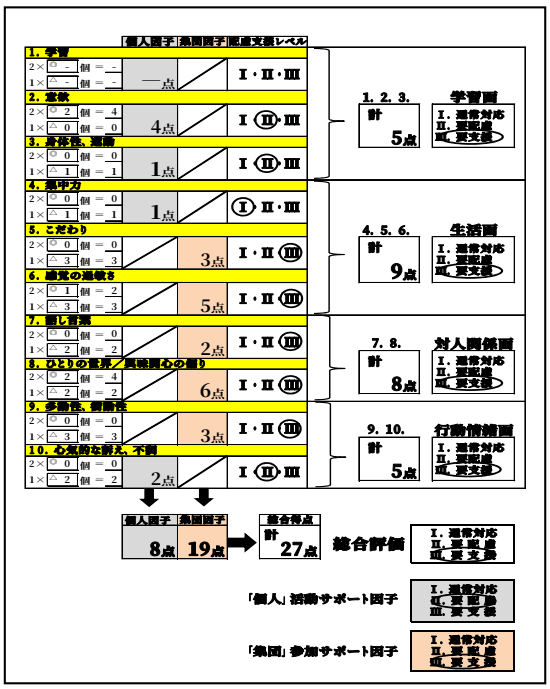
A 尺度[適応スキルの把握]について

社会性領域、集団参加スキル群、総合獲得レベルに１学年の遅れがみられたことから、適応スキルにやや遅れのあることがうかがわれた。未通過項目は、「いつも一緒に遊んだ

りおしゃべりする仲の良い友だちが 2～3 人以上いる」「友だちが困っている時に手助けをする」「友だちが失敗したとき、慰めたり励ましたりする」「話し合いで自分の意見が周囲に受け入れられなくても皆の考えに合わせる」などであった。



B 尺度[特別な支援ニーズの把握]について
多くの領域において要支援レベルであった。特に、こだわり領域、ひとりの世界・興味関心の偏り領域、感覚の過敏さ領域、話し言葉領域、多動性・衝動性領域、対人関係面など、周囲の世界との関わり方や反応の示し方に関する領域において支援ニーズがあることがうかがわれた。チェック項目は「何でも自分の思い通りにしたがる」「極端に怖がる物（人）や活動がある」「あまり考えず、すぐに「わからない」と言う」などであった。



総合的評価／解釈
　本児は適応スキルにおいて１学年程度の遅れがみられた。また、興味関心の偏りや感覚の過敏さ、こだわり、話し言葉など、周囲の世界との関わり方や反応の示し方に関する領域に特別な支援ニーズがあることがうかがわれた。
　設定された活動場面ではルールを理解し行動することができるが、予測できない状況や想定していたことと違う事態が起こった時に気持ちが崩れたり、他者の失敗やネガティブな状況に対して激しく動揺する様子がみられた。

②他検査の結果
　田中ビネー知能検査Ｖの検査結果
暦年齢５歳６か月

精神年齢	知能指数
5:08	103

全般的な知的発達に遅れはみられなかった。言語性の課題では、すぐに「わからない」と言ったり自信のない様子がみられたが、数概念や曜日等は理解しており、左右の弁別も可能であった。言語説明能力はそれほど高くなく、絵の不合理の説明では、理解していてもそれを十分に言葉で表現できない様子がみられた。また、視覚的な操作は良好だが、模写については、形はとらえているものの、バランスの悪さがうかがわれた。

③支援目標[個別の指導計画など]
　思い通りにならないと気持ちが崩れたり、他者の失敗に動揺して繰り返しその失敗を指摘したり、適切に行動できなくなる様子から、長期目標を「想定外のことが起きても気持ちを適切にコントロールし活動に参加できる」とし、短期目標を「失敗を泣かずに受け入れられる」とした。

④支援・手立て
　勝敗や成功・失敗のある活動を繰り返し経験できる機会を設け、その中で勝ったり負けたりすること、失敗してもまた失敗するとは限らず、結果は毎回異なること等を伝え、様々な可能性への見通しをもたせる。そして、本児の気持ちを言語化して確認しながら気持ちの状態への気付きを促す。ネガティブな状況に直面した時のふるまい方や気持ちの切り替え方を実際の場面で示し、似た状況でどのように対処するか丁寧に確認しながら落ち着いて状況に対処できるよう促すとした。

教師や支援者は、子どもの学校適応スキルをアセスメントし、その結果を整理分析し、より明確な支援目標を立案することが大切である。
この際に、うまくやれていない側面や苦戦している部分のなかで、優先的に支援すべきこ

とを１～２つ抽出することが求められる。数多くの教育支援ニーズが導かれた場合、そのなかから、限られた教育期間や学校生活の時間で優先性・緊急度の観点から、または保護者・家族と充分に協議し、どんな子どもに育ってほしいか（将来の展望）という生涯発達の視野に立ち、支援目標を設定する。知能検査（WISC-Ⅳ、K-ABC-Ⅱ、DN-CAS、田中ビネー知能検査Ⅴ）や発達検査（新版Ｋ式発達検査、ITPA 言語学習能力診断検査、LCSA 学齢版言語コミュニケーション発達スケール、新版S-M 社会生活能力検査）などの様々なアセスメントツールを使用した結果、子どもの長所と短所を導き出すための分析と解釈が求められる。つまり、何が発達課題であり、どのような活動が苦手なのか。その逆に、全体的な発達や教科等の到達から鑑みて、何が良好であり、どのような活動が得意かをみつける。こうしたプロフィールを描き出すことが必要となる。こうして導き出された長所はより一層促進するための支援目標と手だてを考え、短所においてはいかに改善に向けて環境設定を工夫し援助するかを査定することがアセスメントの重要な役割となるだろう。アセスメントや本人・保護者・家族からの要望などを受けて、以下の４つの教育支援を個別に展開することが望まれる。

㋐発達段階・適応スキルの獲得に応じた支援
〔認知、言語コミュニケーション、運動、社会性、生活習慣など〕

㋑行動・情緒の問題への支援
〔学習、意欲、身体性・運動、集中力、こだわり、感覚の過敏さ、話し言葉、自己中心性・興味関心の偏り、多動・衝動性、心気的な訴え・身体不調の問題と安全管理など〕

㋒環境整備による支援
〔障害特性にもとづく施設整備、教室環境、学習形態（個別、グループ、クラスなど）の設定、教材・学習時間の工夫など〕

㋓医療・福祉機関との連携による支援
〔健康管理や医療的ケア、福祉的ニーズへの配慮、家庭での支援ニーズへの配慮、チーム援助による方法など〕

そして、学校生活のなかで（特に、授業において）具体的にきめ細かい指導を実現するために個別の指導計画（授業や指導場面ごとに指導目標と手だてを記載した計画書）を立案しながら実践していくことが課題である。

＜引用文献＞

①American Psychiatric Association（2000）：Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 4thEd Text Revision APA, Washington DC. （高橋三郎・大野裕・染谷俊幸（訳）(2002). DSM-Ⅳ-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル．医学書院.）

②DuPau, G. J., Power, T. J., Anastopoulos, A. D., & Reid, R.（1998）：ADHD RATING SCALE-Ⅳ：Checklist, norms, and clinical interpretation. New York, The Guilford Press.（坂本律訳（2008）：診断・対応のための ADHD 評価スケール ADHD-RS チェックリスト，標準値とその臨床的解釈．明石書店.）

③江村早紀・大久保智生（2012）：小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討．発達心理学研究，23，241-251.

④飯田順子・石隈利紀（2002）：中学生の学校生活スキルに関する研究―学校生活スキル尺度（小学生版）の開発―．学校心理学研究，5，49-58.

⑤飯田順子・石隈利紀・山口豊一（2009）：高校生の学校生活スキルに関する研究―学校生活スキル尺度（高校生版）の開発―．学校心理学研究，9，25-35.

⑥井澗知美・上杉靖子・中田洋二郎・北道子・藤井浩子・倉本英彦・根岸敬矩・手塚光喜・岡田愛香・名取宏美（2001）：Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発．小児の精神と神経，41，243-252.

⑦河村茂雄（2003）：学級適応とソーシャル・スキルとの関係の検討．カウンセリング研究，36，121-128.

⑧小枝達也（2002）：心身の不適応行動の背景にある発達障害．発達障害研究，23，258-266.

⑨熊谷　亮・橋本創一・田口禎子・三浦巧也・堂山亞希・徳増由季子（2012）：学校適応に着目した特別な支援ニーズ尺度作成の試み―ASIST 学校適応スキルプロフィールの開発に向けた基礎的研究―．発達障害支援システム学研究，11，61-69.

⑩熊谷　亮・橋本創一・田口禎子・徳増由季子・三浦巧也・堂山亞希・秋山千枝子（2013）：学校における発達支援の視点に立った適応スキル尺度作成の試み―ASIST 学校適応スキルプロフィールの開発に向けた基礎的研究―．東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ，64，265-276

⑪文部科学省（2012）：平成 23 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について.

⑫文部科学省（2012）：通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 熊谷亮、橋本創一、田口禎子、徳増由季子、三浦巧也、堂山亞希、秋山千枝子、学校における発達支援の視点に立った適応スキル尺度作成の試み-ASIST学校適応スキルプロフィールの開発に向けた基礎的研究-、東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ、査読無、64 巻、2013 年、253-264 http://hdl.handle.net/2309/132653

② 熊谷亮、橋本創一、田口禎子、三浦巧也、堂山亞希、徳増由季子、学校適応に着目した特別な支援ニーズ尺度作成の試み-ASIST学校適応スキルプロフィールの開

発に向けた基礎的研究-、発達障害支援システム学研究、査読有、11 巻、2013 年、51-70

③ 熊谷亮、橋本創一、田口禎子、三浦巧也、堂山亞希、徳増由季子、発達支援の視点に立った学校適応スキルと特別な支援ニーズの検討-ASIST 学校適応スキルプロフィールを用いた検討-、発達障害研究、査読有、35 巻、2013 年、372-380

〔学会発表〕（計７件）

① 三浦巧也、橋本創一、熊谷亮、小島道生、霜田浩信、発達障害児の学校適応と SST～ASIST 学校適応スキルプロフィールと SST プログラムの学校実践～、日本 LD 学会第 23 回大会、2014 年 11 月 23- 24 日、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）

② 熊谷亮、橋本創一、三浦巧也、田口禎子、不登校・不適応経験のある高校生の学校適応支援ニーズの把握に関する研究-ASIST 学校適応スキルプロフィール・自記式シートの開発-、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7-9 日、神戸国際会議場

③ 熊谷亮、渡辺雅俊、宇野宏幸、藤野光裕、小島道生、発達障害児の認知特性と学校適応の評価・支援-学習活動や学校生活のサポートを考える-、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7-9 日、神戸国際会議場

④ 熊谷亮、橋本創一、堂山亞希、田口禎子、通常学級に在籍する教育的配慮を要する児童の特別な支援ニーズタイプの検討、日本発達障害学会第 49 回研究大会、2014 年 8 月 23-24 日、宮城教育大学

⑤ 橋本創一、熊谷亮、田口禎子、霜田浩信、爲川雄二、発達障害児の学校適応を評価する新たなアセスメント法～ASIST 学校適応スキルプロフィールの開発と検討、日本 LD 学会第 22 回総会 2013 年 10 月 12-14 日、パシフィコ横浜

⑥ 熊谷亮、橋本創一、発達初期段階にある知的障害児の発達プロフィールの検討（１）、教育心理学会第 55 回総会 2013 年 8 月 17-19 日、法政大学

⑦ 熊谷亮、橋本創一、通常学級の遅れの疑いのある小学生における学校適応スキルに関する研究-ASIST 学校適応スキルプロフィールを用いた検討-、日本教育心理学会第 54 回総会、2012 年 11 月 23-25 日、琉球大学

〔図書〕（計１件）

① 橋本創一、熊谷亮、大伴潔、林安紀子、菅野敦、ASIST 学校適応スキルプロフィール-適応スキル・支援ニーズのアセスメントと支援目標の立案-、福村出版、2014

６．研究組織

(1)研究代表者

橋本　創一（HASHIMOTO Soichi）
東京学芸大学教育実践研究支援センター
教授
研究者番号：10292997

(2)連携研究者

菅野　敦（KANNO Atsushi）
東京学芸大学教育実践研究支援センター
教授
研究者番号：　10211187

大伴　潔（OTOMO Kiyoshi）
東京学芸大学教育実践研究支援センター
教授
研究者番号：30213789

林　安紀子（HAYASHI Akiko）
東京学芸大学教育実践研究支援センター
教授
研究者番号：70238096